村上龍著「逃げる中高年、欲望のない若者たち」幻冬舎文庫、幻冬舎 2014 年 8 月 5 日刊を読む

逃げ切りの中高年、犠牲になる若者たち

１．わたしより 3、4 歳年上の、団塊の世代の友人たちが定年を迎えはじめている。あいつどうしてるんだろうな、と話題になることが増えた。わたしの仕事上の友人だからそのほとんどはマスコミ関係か編集者である。彼らは、たいてい優雅な定年後を迎えている。在職時の給料もよかったが、年金や退職金もそれなりで、郊外や田舎に移って好きな釣りをしたりして過ごしている人が多い。現役時代は無能でほとんど使えなかった人もいるが、そういう人も路頭に迷ったりしていない。もちろん彼らは正当な報酬を受け取っているわけだが、「うまく逃げ切った」と言い換えることもできる。

２．問題は、今の若者たちの多くが不公平感をつのらせていることだ。希望通りの就職ができて、生活も安定し､仕事にもやりがいを感じているという若者はいったい何パーセントくらいだろうか｡20 代後半で結婚して、子どもを作り新居を構えるのはほとんどの若い男にとってきわめてむずかしいことになっている。しかし、考えてみれば不思議な話だ。20 代前半で仕事に就いて、20 代後半で結婚し、子どもを作り、30 代になって新居を構える、というのは贅沢でも何でもない。ごく普通のことだ。世界有数の経済大国である日本で、それが非常に困難になっている。

３．もちろん団塊の世代の中には、優れた能力があって立派な仕事をした人たちも大勢いる。だが、高度成長があり、少子高齢化もなく、中国をはじめ東アジアの安い労働力と競合しなくて済み、需要も今と違って旺盛だったという時代状況の違いだけで、世代間に生活の差ができてしまった社会では、恵まれない層に怨嗟が生まれる。

４．上の世代に対し、尊敬ではなく、怨嗟を抱いている若者は少なくないだろう。若者の多くは無能だから職を得られないわけではなく、国際的な経済状況の変化の中で、犠牲になっている部分も確かにあるからだ。いったいどうすればいいのか、わたしにはわからない。目の前にいる個人だったら話は別だが、層としての若者に対してのアドバイスはできない。目の前の個人に対しても、専門的な技術やスキルを磨くほうが有利だ、くらいのことしか言えない。だがおそらく今の時代のほうが普通なのだろう。高度成長のころ、つまり巨大な需要があった時代のほうが、きっと異常なのだ。

５．現代の若者の多くは、世代の循環を意識するのがむずかしい。今の中高年たちも自分たちと同じような青春時代を過ごし、自分たちと同じような境遇で努力したと思うことができないからだ。高度成長、バブル、そして失われた 20 年を通して、世代間に深刻な断絶が生まれている。政治家もマスメディアもその断絶を語らない。だから、その断絶が解消される可能性はゼロだ。

P123 ～ 126

［コメント］

「ではどうしたらよいか」を考えるのが著者から読者に与えられた課題、日本の課題、世界の課題だ。著者である村上龍氏の解答の一つが示されている TV 番組が 「カンブリア宮殿」かもしれない。問題提起の本書を是非、御一読を。

― 2015 年 5 月 1 日林　明夫記―